

記憶の品

をたどって

6

tadotte@asahi.com

砂まみれのケースに入った名札。「田老一小」とあり、校章があらわれている。にじんだ手書きの文字は「四年一組 佐々木葵」と読める。

震災から1年半たっても、被災した岩手県宮古市田老地区の住宅跡に残されていた。

持ち主を捜して昨秋、学校や周辺の住宅、店舗を回った。行き着いた先は、漁港横の山を削って造成した高台の集団移転地だった。

仮設住宅から移ったばかりの佐々木せつ子さん(58)は、名札を見て驚いた。



「うちの次男のものです」27歳の次男は、震災前から関東で働いている。「大切なものは、よく机の引き出しに入れていました」

せつ子さんによると、もともとケースは青だった。いまは完全に色落ちしている。

机に入れた？ 四年一組の名札



見つけた名札。もともとケースは青だったという



震災遺構の「たろう観光ホテル」＝いずれも岩手県宮古市

田老地区は、「万里の長城」と呼ばれた二重の巨大防潮堤で守られていたが、津波はそれをやすやすと越えた。181人が犠牲になった。

佐々木さん一家は防潮堤のすぐ前に住んでいた。次男が小学2年の時、防潮堤からジャンプして足の骨を折った。名札はその近くにあった。

せつさんはあの日、地震の直後に、港の作業場から自宅に戻った。さらに車で内陸の親族宅を目指したが、津波が防潮堤を越えることはないだろうと思っていた。坂の上で振り返って、腰を抜かした。街が海水に沈んでいた。次男から携帯電話に連絡があった。「大丈夫、大丈夫」

と強がった。でも、自宅は土台だけになった。後日、見つけたのは、せつさんの長靴の片方だけ。名札は数少ない「記憶の品」になった。

一帯は災害危険区域で、家は建てられない。もう海の近くでは暮らしたくない。仕事場も内陸に変えた。遠洋漁業を続けてきた夫の常夫さん

(64)も昨秋、船を下りた。移転先の高台には、161の宅地がある。新しい家が並び、住宅展示場かともみまがう。見下ろす港のそばに、「たろう観光ホテル」が残る。震災遺構の第1号だ。

6階建てのホテルは3階まで津波の直撃を受けて、壁がぶち抜かれて鉄骨がむきだしになった。その6階で、ホテルの社長が撮影した津波の映像を見せてもらった。